



サハリンと北海道の間に位置する利尻島は、大陸との接点を示すものが発見されることから、明治の初めから考古学者の関心をひく地域の1つでした。島内では現在、旧石器～擦文時代までの31カ所の遺跡が確認されています。

利尻島で最初の人類の痕跡は、鷺泊スキー場のふもとにある栄町キャンプ場遺跡で、今から約13,000年前にさかのぼる石器が昭和51年の発掘調査で発見されています。旧石器時代とよばれるこの頃は、海水面が今よりも低い氷期にあたり、宗谷海峡がまだ陸地でした。北海道は、サハリンやアジア大陸とつながっていたため、北からヒトや動物が南下し、そこから北海道島を舞台とした人びとの生活が始まりました。

利尻島は礼文島と並んで、縄文時代から日本海を北上する対馬海流を通じて、道南や本州の日本海沿岸地域とモノのやりとりをする密接なつながりを持っていました。縄文時代中期に特徴的な円筒形の土器を出す港町1遺跡や野塚の遺跡群、縄文時代後期に生活の場であった本泊や大磯の遺跡群などが代表的です。

縄文時代につづく続縄文時代には、種屯内遺跡でお墓や住居跡が見つかっています。そこからは、当時の漁労技術の高さを示すヤスや釣針など骨角製の漁具も多く出土しています。また、続縄文時代の末期にサハリンの影響を強く受けたススヤ（鈴谷）式土器については、利尻富士町役場遺跡や亦稚貝塚で発見され、当時の廃棄場や住居跡が残されています。

さらにサハリンや大陸と結びつきの強いオホーツク文化は、5～9世紀にかけて利尻礼文をはじめオホーツク海沿岸域に発達しました。島内でも遺跡がもっとも多く残されています。利尻富士町役場遺跡では、オホーツク式土器や石の矢じり、獲物を解体するためのナイフ、骨角製の漁具、食用としたニシンやホッケ、アシカ、オットセイなどの骨が発見されました。また、燻製づくりなどに使ったとみられる石を並べた浅いくぼみも見つかっています。



ススヤ式土器

亦稚貝塚では、オホーツク文化全般にわたる遺物が発見されています。なかでも、クマやキタキツネ、ク



亦稚貝塚から出土した土器

ロテン、タカ・ワシの焼けた骨を集積した祭祀場には、写真左のように10頭の高野などひと回りに線刻された土器とソーメン文が施された完形土器2点が置かれ、クマやクジラを浮き彫りにしたトナカイの角製品も発見されています。こうした状況は、当時の人びとの動物や食に対する畏敬や信仰心をよく表わしています。